

ヴィクトリア朝と明治時代を旅した英国婦人  
～ **Isabella Bird** と *Unbeaten Tracks in Japan*

芦 川 和 也

## 1. はじめに.

マシュー・ペリー ( Matthew Calbraith Perry, 1794・1858 ) の浦賀来航をきっかけに結ばれた1854年の日米和親条約によって、200年余り続いた江戸幕府の鎖国体制が終わり、日本は開国した。さらに1858年の日米修好通商条約によって、神奈川 ( 横浜 ) ・長崎・新潟・函館・兵庫 ( 神戸 ) の五港が開港される。そして、江戸幕府が倒れ明治政府が成立すると、文化の西洋化の波が文明開化という名の下に急速に広まった。世界から隔離されていた日本は一気に欧米社会に追いつこうとしたのである。このような明治時代の初期にいわゆるお雇い外国人と呼ばれる西洋人たちが重要な役割を果たした。

イザベラ・バード ( Isabella Lucy Bird, 1831・1904 ) という老女性旅行家が、日本を訪れた1878年はそのような時代であった。<sup>21</sup> そして、ヨーロッパにおいては世界旅行家が輩出しており、トマス・クック ( Thomas Cook, 1808・92 ) がすでに近代的旅行業を成立させていた時代である。

イザベラ・バードは少女の頃に患った病の後遺症に対する転地療養を兼ねて世界各地を旅行した。主に単身で現地をめぐっているところからもメアリー・キングズリ

---

<sup>21</sup> 日本を訪れた「お雇い外国人」たちの日記や旅行記がたくさん著された時代でもある。そして、その日記や紀行文の発話者／語り手 (narrator) と受話者／聞き手 (narratee) は西洋人である。ここで注意しておかなければならないのは、旅行記などを民俗学的な資料として読むのではなく、作家の一作品として読む場合、そのディスコースに西洋人のもつオリエンタリズムの介在を無視することはできないということである。

— (Mary Henrietta Kingsley, 1862 - 1900) らとともに女性旅行家のはしりと思われる。

## 2. 「日本奥地紀行」

1877年、バードの精神は再び不安定状態となり、医師たちからも転地療養をすすめられた。神経痛や間歇熱、あるいは若い時分に手術した脊椎の痛みなどといわれているが、いずれにせよ、それらの病気の痛みによる精神的な鬱状態が大きな要因であったと考えられる。当時このような転地療養がバードにとってだけのものではないことは、言語学者チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850 - 1935) が日本に来たきっかけが転地療養であったことから分かる。また、バードがまず旅行先に考えたのは、南アメリカのアンデスであった。それをチャールズ・ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809 - 82) に相談したところ、あまり賛成してもらえなかったこともあって、その行く先は極東の、まだあまり西洋人には知られていない国、日本に変わったのである。1878年5月21日に彼女は横浜に到着した。この頃のイザベラ・バードは、既刊の「サンドイッチ諸島での半年」 (Six Months in the Sandwich Islands, 1875) などによって、イギリス国内において女性旅行家の地位を確立しつつあり、経済的な資金も得られるようになっていた。イザベラ47歳の時である。

彼女は、そういった社会的地位のおかげもあって、駐日英国公使ハリ－パークス (Sir Harry Smith Parkes, 1828-85) への紹介状を書いてもらうことができた。このパークス夫妻がバードの日本旅行に重要な役割を担っている。本来、外国人が当時の日本を旅する場合には、その旅程や道筋を記した旅券が必要なのであるが、パークスの発行した旅券は東京以北の全日本と蝦夷地 (北海道) を自由に旅行してよいという、ほとんどオールマイティのものであった。さらに、東京の英国大使館では、ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911) やアーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason Satow, 1843-1929) という日本に非常に造詣の深い人たちから助言を受けた。また前出のチェンバレンとは、人力車で浅草をまわったりもしている。これらの人々のバックアップが、西洋人には未踏の地といってもよい東北地方や北海道の旅に対して、知識的にも精神的にも大きな助けになったであろうことは想像に難くない。そして1878年6月10日に東京の公使館を出発してから、9月17日に船で横浜に到着するまでの旅の記録が『日本奥地紀行』 (Unbeaten Tracks in Japan, 1880) の中心である。

『日本奥地紀行』を今回は大きく三部構成としてとらえてみたい。第一部は横浜から日光まで、第二部は日光から青森から函館まで、そして第三部は北海道の平取を中心としたアイヌ人との生活である。「本当の日本」を

見るためにバードが選んだルート of 全行程は約3か月であり、この期間の長短についてはいろいろな評価を下すことができるが、バードというイギリス人女性の日本観とその変化は読みとることはできる。

船で日本に到着したバードを迎えたのは、開港の影響で日本の中では西洋文明の影響をもっとも受けていた横浜の町であった。重々しい洋館<sup>※2</sup>、舗装された道路や街灯があり、ホテルは「最新設備 (mod. cons.)」が調っており、「甲高い声で (in a nasal twang)」話す外国人旅行者であふれていた。これは、すでに日本を含めた極東地域が世界の旅行家たちの中で認知されていたことを示している。和洋混合状態の横浜で、バードは急速に西洋化していく日本よりも「本当の日本 (the real Japan)」を見たいと願っている。来日した頃にはすでに都市部に見られた、蒸気機関車の音やガス灯、西洋風の店などに彼女が魅了されることはなかった。彼女にとって東洋の西洋化はその文化自体を活気づけたり、豊かにすることはあるものの、あまり興味を喚起させられるものではなかった。

また、日本人の姿について、バードは西洋人の目から酷評している。

The Japanese look most diminutive in European dress. Each garment is a misfit, and exaggerates the miserable physique and the national defects of concave chests and bow

<sup>※2</sup> バードが滞在したのはヨコハマコンチネンタルホテル。現存しているものとは異なる。

legs. The lack of "complexion" and of hair upon the face makes it nearly impossible to judge of the ages of men. . . . Indeed it is to their labours, and to those of a few other Englishmen and Germans, that the Japanese of the rising generation will be indebted for keeping alive not only the knowledge of their archaic literature, but even of the manners and customs of the first half of this century. (LETTER III)

来日当初のバードの日本に対する印象はあまり芳しくなかつたようである。本の中には 'grooviness' という言葉がしばしば用いられており、目新しくなかつたり、あるいは興味を引かれないようなものが多かつたことがうかがえる。また彼女の日本に対する姿勢の変化は「日本奥地紀行」における彼女自身の挿し絵によつても見て取れる。第一信の富士山は鋭角的で上部が不自然に尖塔のようになっている。おそらく来日する途中の船からの富士山であろうが、かなり不正確である。これは最後の方に描かれている富士山の写實的で美しい成層火山の姿を比べてみると興味深い。

さて、日本奥地紀行を始める準備にかかるバードであるが、装備品以外で重要となつたのが同行者である。さまざま候補者がバードの前に現れたもののどのものも一長一短であつた。結局選ばれたのはヘボンのもとで働いていた、伊藤という少年である。バードの英語が分かつたという以外は、伊藤に好感を持っていないようであ

るけれども、それでも給料を先払いまでして雇ったのはやはりどこかしらウマがあったのであろう。ちなみに、西洋人に対してはフルネームを記載しているバードが、「日本奥地紀行」でこのあと重要な役回りを得る伊藤を、ただ「伊藤」とだけ記している。これはコロニアル的な抑圧ととらえることもできる。が、単に「伊藤」の方が名乗らなかったのかもしれないし、これは想像の域を出ないが、基本的には順調にこなすことのできたこの旅を鑑みて彼は明治政府のスパイであったという説まである。第一部では日光の金谷ホテルへの絶賛が目につくが、日本人の親子の関係や女性についての記述が興味深い。

I never saw people take so much  
delight in their offspring. . .  
(LETTER X)

The Japanese have a perfect passion  
for children, but it is not good for  
European children to be much with  
them, as they corrupt their morals,  
and teach them to tell lies.  
(LETTER XVI)

The girls marry at sixteen, and  
shortly these comely, rosy,  
wholesome-looking creatures pass  
into haggard, middle-aged women  
with vacant faces, owing to the  
blackening of the teeth and removal  
of the eyebrows. . . (LETTER X -  
Continued)

バードは決してただ、客観的に人間や事物を表現してはいない。風景描写についても彼女の美意識を通してのものであるし、引用のような人物描写は、西洋人としての

主観に基づき、それとの比較が基本的に行われているのである。また興味の対象が人々の衛生状態にあるのは宣教師の娘として、子どもや娘に当たるのは女性としてというファクターが大きい。

第二部の部分では、いわゆる「本当の日本」、外国に知られていない日本の農村の様子が表されている。実際東北地方の現状は、都市部の日本人とはかなり隔たりがあった。

I write the truth as I see it, and if my accounts conflict with those of tourists who write of the Tokaido and Nakasendo, of Lake Biwa and Hakone, it does not follow that either is inaccurate. But truly this is a new Japan to me, of which no books have given me any idea, and it is not fairyland. (LETTER XI)

[T]he lack of privacy was fearful, and I have not yet sufficient trust in my fellow-creatures to be comfortable without locks, walls, or doors! Eye were constantly applied to the slides of the room. . . . My fears. . . had really no justification. I have since travelled 1200 miles in the interior, and in Yezo, with perfect safety and freedom from alarm, and I believe that there is no country in the world in which a lady can travel with such absolute security from danger and rudeness as in Japan. (LETTER VI)

第三部では、日本人にもあまり知られていないアイヌの

人々とその生活が記されている。アイヌ人描写におけるバードと伊藤の立場の違いが探れて興味深い。バードはアイヌ人たちの外見を、「アジア的というよりもむしろヨーロッパ的である」と多少の身びいきを混ぜながら表している。

I think I never saw a face more completely beautiful in features and expression, with a lofty, sad, far-off, gentle, intellectual look, rather that of Sir Noël Paton's "Christ" than of a savage. His manner was most graceful. . . .  
(LETTER XXXV)

けれども「アイヌはイヌと人間のアイノコである」と考える日本人の伊藤は、「礼儀作法は日本人が彼らに教えたものである」などと馬鹿にしている。

"Treat Ainos politely!" he [Ito] says; "they're just dogs, not men;" and since he has regaled me with all the scandal concerning them which he has been able to rake together in the village. (LETTER XXXV - Continued)

日本国内においては、周縁的な人物に追いやられているアイヌ民族も、第三者的立場である西洋人のバードの目を通すことによって、むしろ客観的にとらえることができる。けれども、日本人的な主観からは逃れることはできても、そこには別の西洋的な主観が介在することは確かである。例えば、バードはキリスト教的立場から、ア

イヌ人を「子ども」と考えている箇所がそのことを示している。

Surely these simple savages are children, as children to be judged; may we not hope as children to be saved through Him who came "not to judge the world, but to save the world"? (LETTER XXXVI)

そして第三部の終わりとともに、バードの奥地紀行は終わるのであるが、旅行中忠実に仕えてくれた伊藤に対する記述の変化が、バードの日本に対する印象の変化を顕著に表しているといえよう。

[W]hen Ito woke me yesterday morning, saying, "Are you sorry that it's the last morning? I am," I felt me had one subject in common, for I was very sorry to end my pleasant Yezo tour, and very sorry to part with the boy who had made himself more useful and invaluable even than before.  
(LETTER XLI)

I have parted with Ito finally today, with great regret. . . . I miss him already, though he insisted on packing for me as usual, and put all my things in order. His cleverness is something surprising. He goes a good, manly master, who help him to be good and set him a virtuous example, and that is a satisfaction. (LETTER XLII)

### 3. イギリスのバードと日本のバード.

バードの生きた19世紀のイギリスは、徐々に女性に対する権利が認めつつあるものの、依然として女性が仕事について収入を得るといえるのは困難な時代であったといえる。実際、婦人参政権についていえば、バードの亡くなった1904年の時点ではまだ認められておらず、更に十数余年を要する。

「エディンバラ旧市街に関する覚書」(Notes on Old Edinburgh, 1869)の中で、バードが当時の女性に対する処遇に関心、あるいは不満を持っていたことが分かる。また、1892年、英国地理学会の評議会が初めて21人の女性が特別会員として選出され、バードもその中の一人であった。この女性選出に対する非難の声は非常に大きく、カーゾン(George N. Curzon, 1859-1925)らによる反対演説が支持され、以後しばらく女性会員を選出することが否決されてしまった。バード個人としては、墓碑銘にその肩書きを記しているように非常に喜んでいただようであるが、その一方、女性に対するそのような処遇を「卑劣なほどに女性を不当に扱っている」と抗議している。

では、彼女の訪れた日本在住の欧米人たちにはどのように映ったのであろうか。クララ・ホイットニー

(Clara A. N. Whitney)<sup>23</sup> の「クララの明治日記」(Clara's Diary, 1979) にバードに関する記述がある。クララはバードのことを「奇妙な婦人」と呼び、以下のように記している。

Thursday, October 3: . . . We were revenged this evening, however, for when Mr. Dixon got to the legation, Lady Parkes could not go, but sent instead a very disagreeable old maid, Miss Isabella Bird, who is going to write a book. She pumps everybody until everyone hates to go near her.<sup>24</sup>

Sunday, October 6: . . . A Mr. Ewing -- Mr. Dixon's bosom friend -- has just arrived from Scotland; he was there, also Mr. Dixon himself, along with his tiresome old Miss Bird, who came in late and took a back seat nimbly. . . . He looked so utterly miserable today as he walked off with his old maid as far as possible from her, and gave me such a sorrowful glance as I swept by and returned his bow with hauteur.<sup>25</sup>

バードが来日する数年前から日本で生活している若いクララにとって、滞在がわずか8か月のバードが日本についての旅行記を書くことに若い反抗心が煽られたのかも

---

<sup>23</sup> 勝海舟(勝安房, 1823-99)の三男梅太郎は、明治十九年、四つ上のクララ・ホイットニーと結ばれ、六人の子をもうけた。明治八年、十四歳で日本の土を踏んだクララの書き込んだ日記が「クララの明治日記」である。勝海舟以外にも、明治天皇(1852-1912)、福沢諭吉(1834-1901)、森有礼(1847-89)、伊藤博文(1841-1909)、三条実美(1837-91)、新島襄(1843-90)、大山巖(1842-1916)、パークス、ヘボン、グラント將軍(Ulysses Simpton Grant, 1822-85)、フェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908)、チェンバレン、アーネスト・サトウなどが一少女の日常生活の場面に登場している。

<sup>24</sup> Clara's Diary. 205.

<sup>25</sup> Clara's Diary. 205.

しれない。この日記が書かれたのは10月であるから、バードは3か月に及ぶ日本奥地旅行を終えたあとの日記である。それでもクララ個人にとってイザベラ・バードという女性はあまり好ましい人物とは映らなかつたようである。

けれども、在日の大人の男性たちには、バードという女性は違うように映った。日本の奥地紀行が成功した最大の理解者であり協力者パークス夫妻をはじめとする豊かな人間関係にバードが恵まれていたことは彼女の「日本奥地旅行記」だけではなく、パークス夫妻やアーネスト・サトウらに関する記述からも窺うことができる。バードが日本を離れた数年後に出版された「日本奥地紀行」のイギリス国内における盛況ぶりへのパークスらの評価からも分かるのである。エドワード・リードが「日本奥地紀行」とほぼ同時に「日本——その歴史、伝統、宗教」(*Japan, Its History, Tradition and Religion*)を出版しているが、パークスは「あなたの見聞は広く受け入れられています、サー・エドワードの見聞はどこにも受け入れられていません！」と評価している。また、チェンバレンは「日本事物誌」(*Japanese Things*, 1890)の中で、サトウはパークスへの手紙(1881年1月)の中でそれぞれ彼女の旅行記に対する賛辞を送っている。

むろん、この旅行記に対して批判的な立場をとったものもいた。動物学者ブラキストン(Thomas

Wright Blakiston, 1832-91) は「蝦夷地の日本」(Japan in Yezo)の中で「日本奥地紀行」の記述について、客観的に見れば概ね正しいが、厳しい筆致で批判している。だが、資料として読む場合の記述の些末な認識の誤りが、彼女の旅行記の価値自体を損なうほどのものではないであろう。

#### 4. 結び

イザベラ・バードは女性に対する処遇にまだまだ制限のあった、イギリス国内の社会状況を積極的に変えようとする運動の旗手になることはなかった。伝記に以下のようにあるように、初老になって彼女がロッキー山脈や日本から始める数々の本格的な旅は、バード自身の自由をイギリス国外に追求するものであったと思われる。

イザベラ・バードは女性に対する処遇にまだまだ制限のあった、イギリス国内の社会状況を積極的に変えようとする運動の旗手になることはなかった。伝記に以下のようにあるように、初老になって彼女がロッキー山脈や日本から始める数々の本格的な旅は、バード自身の自由をイギリス国外に追求するものであったと思われる。

ヴィクトリア朝においてバードは、一介の旅行好きの女性としてではなく、旅行家というプロフェッショナルと認められ、収入を得るとともに、社会的な地位も築い

\*6 チェックランド, 216.

た。バードの海外への渡航は、当時のイギリス社会からの逃避とも考えられる。イギリス国内におけるバードの不安定な精神状態から考えれば、外国というある意味異世界に身をおくことによって、国内では獲得することのできない男性の権利を獲得しようとしたのかもしれない。

確かにバードは、頑固で自己中心的な面もあるが、彼女にとっては旅行によって以外当時の風潮を打ち破る方法がなかったのかもしれない。異国で得た経験や旅行記をバードは数多くイギリス国内で講演している。それらの旅行記や講演は人々から、非常に好評を博し、熱心に耳を傾けてもらえた。バードは数少ないヴィクトリア朝における有名な女性の一人となることができた。バードはそうすることによって自己のアイデンティティを確立していたように思えるのである。

【参考文献】

- Barr, Pat. *The Deer Cry Pavilion*. London: Macmillan, 1968.
- ..... *A Curious Life for a Lady*. London: Macmillan, 1970.
- Bird, Isabella L. *Unbeaten Tracks in Japan*. London: John Murray, 1880.
- Chamberlain, Basil Hall. *Japanese Things*. Vermont: Charles E. Tuttle Company, Inc. 1971.
- Dickins, Frederick Victor. *The Life of Sir Harry Parkes, Sometime Her Majesty's Minister to China and Japan*. London: Macmillan and Co., 1984.
- Whitney, Clara A. N. *Clara's Diary*. Tokyo: Kodansha International, 1979.
- チェックランド, オリヴァー. 「イザベラ・バード旅の生涯」. 川勝貴美訳. 日本経済評論社, 1995年.
- 大滝友和. 「米沢街道峠紀行」. 自費出版, 1998年.
- 金坂清則. 「旅する女性——イサベラ・バード論に向けて——」, 「性のポリフォニー」. 原田平作・溝口宏平編. 世界思想社, 1990年.
- 加藤幸子. 「異をもった女」. 講談社, 1996年.
- 常盤新平. 「金谷ホテル物語・信義は利なり」, 「潮」(1996年1-3月号). 潮出版.
- 平野久美子. 「イサベラバードのアルカディア, 山形県」, 「るるぶ」(1991年2月号). 日本交通公社.
- 松田洋之. 「イザベラ・バード小傳」, 「越佐社会科研究会紀要第8号」(1999年3月).
- 矢島裕紀彦. 「長旅が元気の秘訣(バードに学ぶ)」, 「サライ」(1995年2号).